



母性を超える〈いのちへの感度〉へ：
母性研究とフェミニズムの視点から (コメント
2014年度コロキウムより)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田間, 泰子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14911

コメント——2014年度コロキウムより

母性を超える〈いのちへの感度〉へ： 母性研究とフェミニズムの視点から

田間 泰子

はじめに

福永さんのお話から、私は3つの問いをいただきました。第一に「はみ出す『わたし』」というポジショニング、第二にこの社会にケアの倫理の可能性はあるか、第三に「はらむ」者と「はらまない／はらめない」者との非対称性を踏まえたうえで、親密圏を公に開きながら、〈いのち〉の感度というまなざしを「はらめない／はらまない」者として得る回路はあるか、ということです。

はらむ／はらめない／はらまないアイデンティティとフェミニズム ——あるいは「母性」

日本で「母性」と言えば、第二次世界大戦前の第一波フェミニズム、母性保護論争が想起されます。与謝野晶子は多くの子どもを産み育てたフェミニストですが、その彼女が「母性偏重を排す」（1916年）を主張したことは非常に興味深いです。

私が彼女から受け取るメッセージは、自我は「流転のなか」にあるということ、つまり、「母性」は複数のアイデンティティのうちの一つだということです。J. バトラーは『ジェンダー・トラブル』で「女」というカテゴリーの成立の困難さを主張していますし、A. センも私たちが複数のアイデンティティを前提し選択することが重要だと述べています。少し遡れば、J. W. スコットが『ジェンダーと歴史学』において、差異があるから

こそ人間は本質的に平等なのだと断言しています。アイデンティティの固定化に対するたえまない挑戦としての差異があり、さまざまな差異——いかなる固定的な二項対立の意味をも混乱に陥れ、分裂させ、意味不明なものにしてしまうような差異のうえに、平等が成立するのです。そこで晶子に戻るなら、複数のアイデンティティを有し、流転し成長する「私」という彼女の主張は、彼女に時代が追いついたという感じです。フェミニズムは、グローバルにポジショナリティを敏感にとらえることで、ある時には「女」や「母親」や「娘」としての連帯を可能にし、またある時には別のカテゴリーで人々をつなぐ絆の一つなのです。

徹底的な相対化による尊重

しかし、現実には「はらめない／はらまない」者は、社会のいろいろな場ではみだしてしまうのではないかと、という疑問は残ります。そこで、もう少し丁寧に「母性」のことを考えます。

私は、母性とは本質的なものではなく、「子ども」との関係性のありかたの一つであり、社会により時代により、そして個人により異なると考えます。興味深いのは、晶子の、出産と育児に関する考えです。その特徴は、出産を非常に一つ一つ個別の体験と捉えることで、らいてうのような神秘化を避け徹底的に相対化していること、出産と育児を峻別し、育児は両親が「人」であらんがために行うべきことだと位置付けていることです。「女もまた人である」（『婦人と自尊』1917年）し、「男もまた人であれ」と言うことで、非本質主義、個性と差異に深い洞察をもっていたと思います（『男女の本質的平等観』1916年）。それは、H. アーレント『人間の条件』の「多数性」（原著1958年、翻訳1994年）という思想にもつながります。要は、「はらめない／はらまない」というカテゴリーは、「はらむ」ことを神秘化する作用もあるわけで、フェミニズムは与謝野晶子のようにその解体をこそ主張すべきだと思います。

〈いのち〉の感度を私たちのものにすること

「いのち」と国家との関係は、フェミニズムの大きな問題系の一つです。第一波フェミニストの多くは、結局、戦時体制を翼賛しました。戦後の日本とはいえば、高度経済成長を支えたものはまず1949年から1959年までの人工妊娠中絶件数で、公的統計だけで約1000万件でした。少数の子どもを産んでよりよく育てましょう、という母性の名のもとに中絶させつつ、1960年代以降は母性喪失を非難していったわけで、「〈いのち〉の感度」ゼロです。さらに現代、上野千鶴子さんは、1990年に「なぜ人間の生命を産み育て、その死をみとるという労働（再生産労働）が、その他すべての労働の下位におかれるのか」と問いましたが、まだ解かれていません。

1つの解決への道筋は、労働／保護／国家を私たちのものとすることにあります。このときの「私たち」とは、上に述べてきたような多様で差異のある、流転し変化する私たちです。

多様で一人一人ユニークな私たちは皆、はみ出していますが、そもそも「妊婦」という存在が「近代的個人」からはみ出した「私」です。妊婦は、近代国民国家の成立の基盤たる国勢、デモグラフィックな人口を支える身体でありながら、その単位たる「1」という枠からはみでているからです。とって胎児をも「1」にすれば、戦後日本社会など大量殺人社会です。それを「合法的墮胎」で済ませる社会では、「はらむ」者こそがはみ出させられた存在でした。

〈いのち〉の感度は、「はらむ／はらまない／はらめない」というカテゴリー化を超えたときにこそ、誰にももつことができ、違う社会を構想できるのではないのでしょうか。